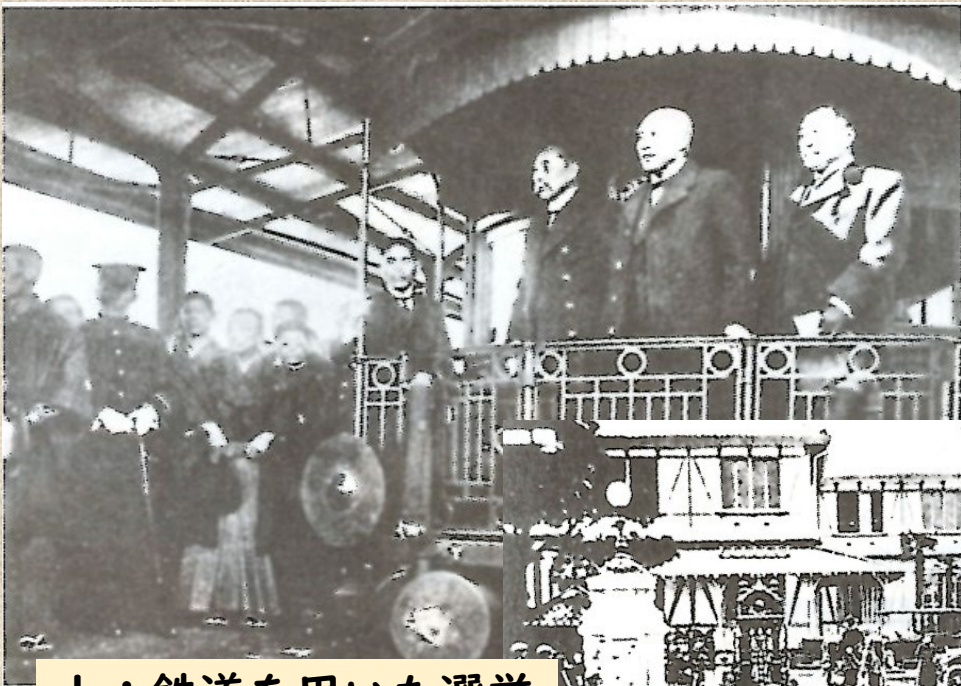


新しい視点で日本近代史を学ぶ
新・日本の近代史（第15回）

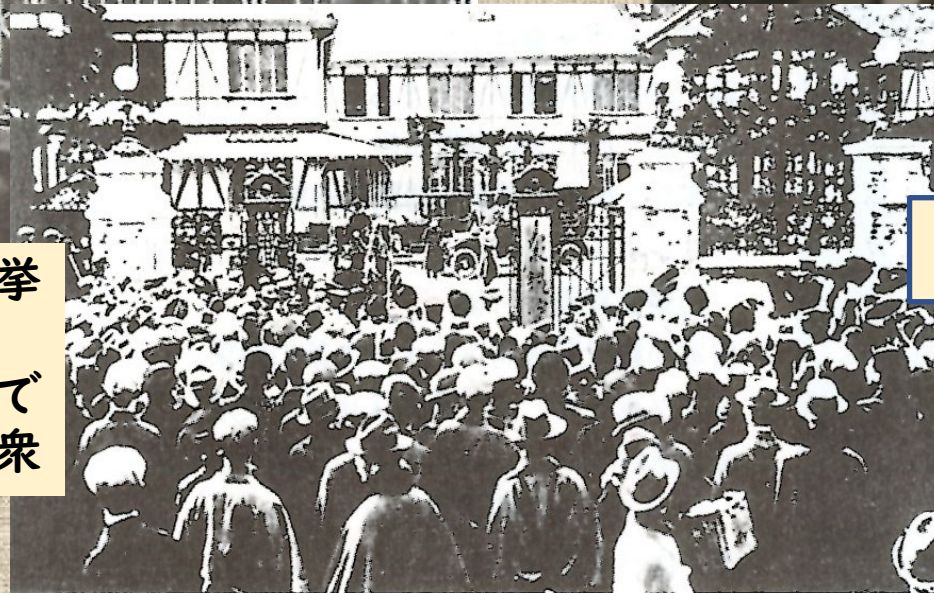
桂園時代から原敬内閣へ ～新しい時代の政治を求めて～

(<http://jugyo-jh.com/nihonsi/>)

I、はじめに 新しい時代の政治を求めて



上：鉄道を用いた選挙
活動を行う大隈重信
右：シーメンス事件で
国会前に集まった群衆



上：原敬

- 1889 帝国憲法制定
- 1890 第一回帝国議会
- 1894~5 日清戦争
- 1900 立憲政友会結成
- 1901 第一次桂内閣
- 1904~5 日露戦争
- 1906 第一次西園寺内閣
- 1908 第二次桂内閣
- 1910 韓国併合
- 1911 第二次西園寺内閣
- 1912 大正時代に
第三次桂内閣
- 1913 大正政変
第一次山本内閣
- 1914 シーメンス事件
第二次大隈内閣
第一次大戦開戦
- 1916 寺内内閣
- 1918 米騒動
原内閣
- 1921 原敬暗殺される
- 1925 普通選挙法
治安維持法

目標を見失った日本＝「明治の終焉」へ

日露戦争の勝利、「世界の一等国」「文明国の一員」にはなったが

- ① **国家目標の喪失**（「坂の上のぼって見たが」）
- ② 傷つき帰国する兵士たち＝戦争の意味への問いかけ
- ③ 戦後もつづく **重税・生活苦**
⇒ 政府への反発の高まり・参政権要求
- ④ 産業革命の本格化⇒ **社会構造の変化**、ついていけぬ人びと
- ⑤ **明治ダイナミズムの消滅**
＝「楽天主義の終焉」「時代閉塞」へ
- ⑥ 社会の多元化・価値観の変化・多様化
⇒ それでもつづく強圧的な政治。
メディアの影響の高まり
社会主義・労働運動のひろがり
社会の閉塞感（啄木「時代閉塞の現状」）
⇒ 大学生の自殺ブームなど



司馬遼太郎『坂の上の雲』
昭和の日本を「愚劣な時代」と考える司馬は、日本海海戦の終了と同時に、この作品を終了させ、戦後を描こうとはしなかった。

産業革命＝社会構造の変化と多様な要求

- ・ **財閥**の出現→負債の削減
 - ・ **旧中間層**(「**旦那衆**」)の拡大
→各種料金引下・営業税の軽減など
 - ・ **新中間層**＝俸給生活者・自由業(**記者・弁護士**)など
 - ・ 都市への人口集中…**職工・貧民**(「**雑業層**」)⇒**労働者**へ
→食料・衛生・生活環境改善など都市政策の必要
 - ・ **地方名望家**(地主など「**旦那衆**」)
→地方の整備・開発(鉄道・道路・港湾)を期待
 - ・ **一般農民**(自作農・小作農)→小作料軽減・地租削減
- ☆政友会…選挙権をもつ地方名望家の意見を重視
財閥や資本家からの資金援助
- ★大蔵省など…緊縮財政による負債の縮減
- ★軍部…軍備拡張など



都市貧民街…さまざまな仕事に従事する人びとが多く居住した。明治末～大正前半の騒動にはこうした地域の住民が多く参加した。

農村中心の時代から都市中心の時代へ
→さまざまな階級・階層、さまざまな要求の出現

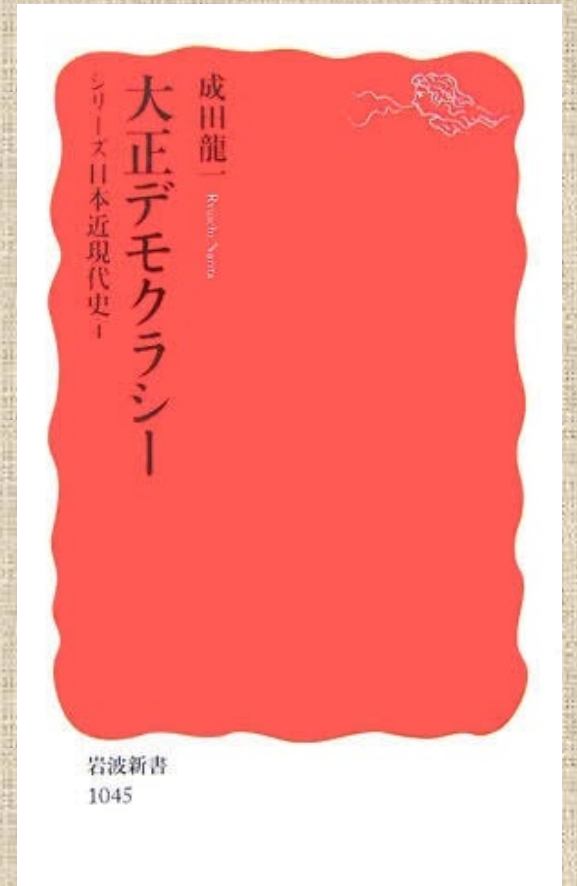
「国民」が藩閥に叛旗を翻す事態に 成田龍一「大正デモクラシー」

「大正デモクラシーとは、その出発点においては、「帝国」に成り上がった明治日本が、従来の構造では対応できなくなったことに由来して起こる運動の総体」となっている。

さまざまな階層によって、旧来の社会構造と秩序に対抗して展開された運動であった。」

「各層が…「国民」を語り出し、「国民」と名指しされるにいたる。

「国民」が跛行的に、つまり不完全な形で形成されながら、藩閥に叛旗を翻す事態となっているといえよう。」



成田龍一『大正デモクラシー』（岩波新書 2007）

日比谷焼打事件が開いた「大正」

①事件の中心＝職工、職人、人力車夫・人足など都市無産大衆、書生・苦学生など

②メディアの「呼びかけ」＝「兵士の血で買った利権の放棄は許さない」と主張

＝排外主義的性格＝「外へ帝国主義」

③政府は戦争で苦しんだ自分たちの意見を聞く義務がある（「＝国民」としての自覚）

普通選挙制度などの要求の出発点に

＝民主主義的性格（「内に民本主義」）

④民衆運動の活発化

＝大正デモクラシー運動の出発点

内に民本主義、外に帝国主義



日比谷焼き打ち事件
フランスで紹介された事件の様相

日露戦争後～大正という時代とは

(成田龍一の指摘に学びながら)

◎「従来の構造では対応できなくなる」時代

経済…農業中心・農村中心⇒商工業中心・都市中心の日本に (前回の内容)

⇒社会の変化…「名望家」「旦那層」「雑業層」「貧農」+新中間層・労働者など

帝国主義の時代…植民地の獲得・大陸進出⇒列強や民族運動との摩擦 (次々回の内容)

思想・文化…富国強兵・「坂の上の雲をめざす」⇒多様な生き方、日常・生活・個人

明治の精神＝国民意識の注入、リーダーの士族的感性と民衆の「客分意識」、立身出世

⇒新時代の精神…国民との前提、個人主義、自由主義、人間の尊厳(ヒューマニズム)

民本主義・天皇機関説、社会主義、帝国主義、国家主義、ファシズムなど

◎「国民」の名のもと「さまざまな階層が、旧来の社会構造と秩序に対抗」

社会問題の可視化…労働問題・小作問題・参政権・女性問題・部落問題・公害・衛生健康・

貧困・住宅問題などなど⇒解決策の模索 (次回の内容)

今回の課題＝時代の変わり目のなかの政治

政府主導、官僚中心の強権的・権威主義的な藩閥政治

⇒国民運動の高揚、議会・政党を基盤とする政治へ

Ⅱ、桂園時代

～二大勢力の妥協と暗闘の時代～



欧州旅行に出発する桂太郎元首相(左)を見送る西園寺公望首相(右)。この直後、明治天皇が死亡、桂は急きょ帰国、西園寺を追って第三次内閣を組閣したことで、第1次護憲運動=大正政変が発生する。

- 1889 帝国憲法制定
- 1890 第一回帝国議会
- 1894~5 日清戦争
- 1900 立憲政友会結成
- 1901 第一次桂内閣
- 1904~5 日露戦争
- 1905 日比谷焼打事件
- 1906 第一次西園寺内閣
帝国国防方針
- 1908 第二次桂内閣
戊申詔書
- 1910 韓国併合
大逆事件
- 1911 「情意投合」演説
第二次西園寺内閣
- 1912 大正時代に
第三次桂内閣
二個師団増設問題
- 1913 大正政変
第一次山本内閣
- 1914 シーメンス事件

桂園時代(1901~13)

陸軍・藩閥(長州)で山県有朋の後継者**桂**太郎と立憲政友会総裁で公家出身の**西園寺**公望が交代で総理大臣を総理大臣をつとめた**時代**。

- 1901~6 第一次桂内閣…日露戦争・**禅譲の密約**
- 1906~8 第一次西園寺内閣…「帝国国防方針案」
- 1908~11 第二次桂内閣…韓国併合・**「情意投合」**
- 1911~12 第二次西園寺内閣…明治天皇死亡大正改元
- 1912~13 第三次桂内閣…第一次護憲運動=**大正政変**
(1913~14 第一次山本権兵衛内閣…シーメンス事件)



上:桂太郎(1848-1913)と右:西園寺公望(1849~1940)

閥族派の代表である桂と、政党の総裁である西園寺。年齢も近く個人的には仲が良かったという。



桂園時代の背景～明治憲法の欠陥？

① 権力の分立・多元性⇒もともと、議会・政党政治を防ぐ目的

- ・ 政府（執行権力）の独立性

- …大臣は天皇（元老）が任命→各大臣は形式的には天皇に直属

- ・ 統帥権（軍隊の指揮権）の独立、他方編成権は内閣に

- 指揮権への、内閣の口出しは困難

- ・ 元老・枢密院などの存在

② 議会の権限の「強さ」

- ・ 立法権・予算審議権＝予算等を人質にできる

- 衆議院（「国民」代表）と貴族院（官僚OBら）

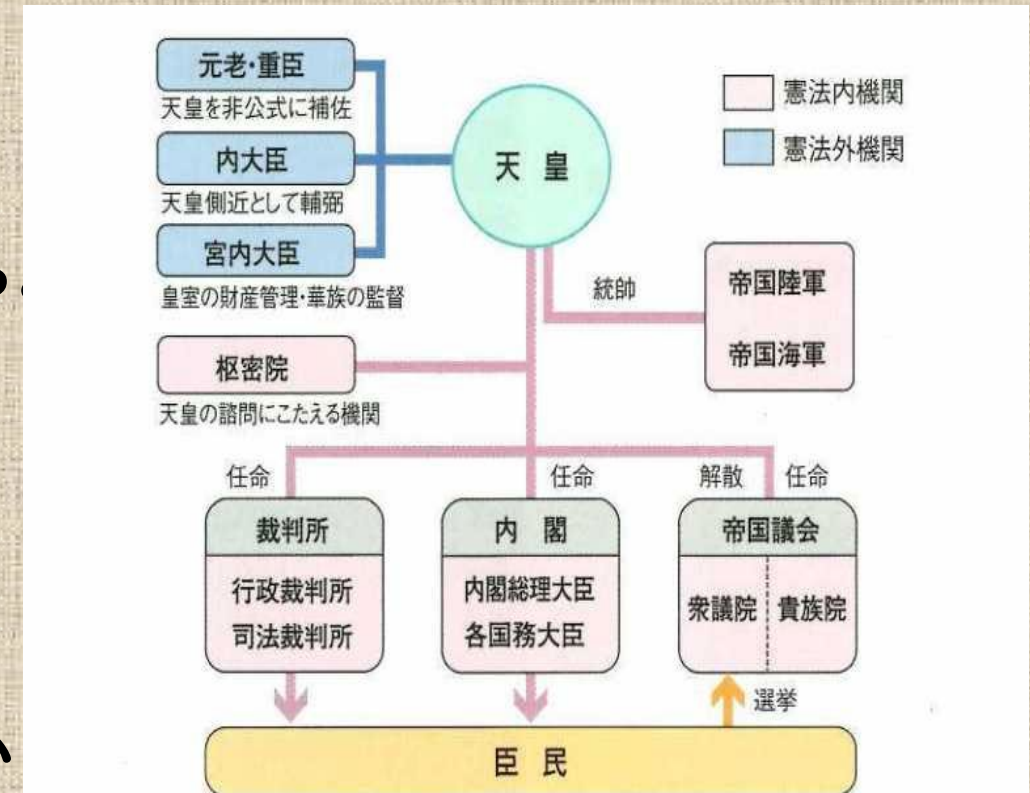
③ 桂（山県派）の権力基盤

- …軍部・官僚・貴族院・枢密院+宮中

議会（衆議院）＝政友会の協力必要

④ 西園寺(政友会)

- …衆議院の多数だけでは政策が実現できない



【大日本帝国憲法下の政治機構】

政府と政党～日清戦争前・後

日清戦争前＝**政府と議会の激突**

憲法以前のやり方を踏襲したい政府＝超然主義
vs.議会の影響力を拡大したい政党＝民力休養
＝減税の実現

⇒衆議院解散と内閣不信任の連続



日清戦争後＝**政府と政党の結合**

増税や予算案承認と引き換えに鉄道建設など実現
⇒この実績をもとに、選挙当選をめざす動き



1900（明治33）年、**立憲政友会**発足
＝憲政党（旧自由党）の参加

予算案は

政府が提出

審議は

帝国議会で

①予算案は先に衆議院に提出(第65条)

②天皇大権と規定されている事項の
予算案は、政府の同意なくしては
議会は削減できなかった(第67条)
〈例 軍艦建造費など〉

不成立の場合(特に衆議院の反対で)

政府

前年度予算

の執行

帝国議会で予算案が不成立の場合、
政府は前年度の予算を施行するこ
とができた(第71条)〈政府にとって
は政治的な敗北を意味する〉

立憲政友会とは

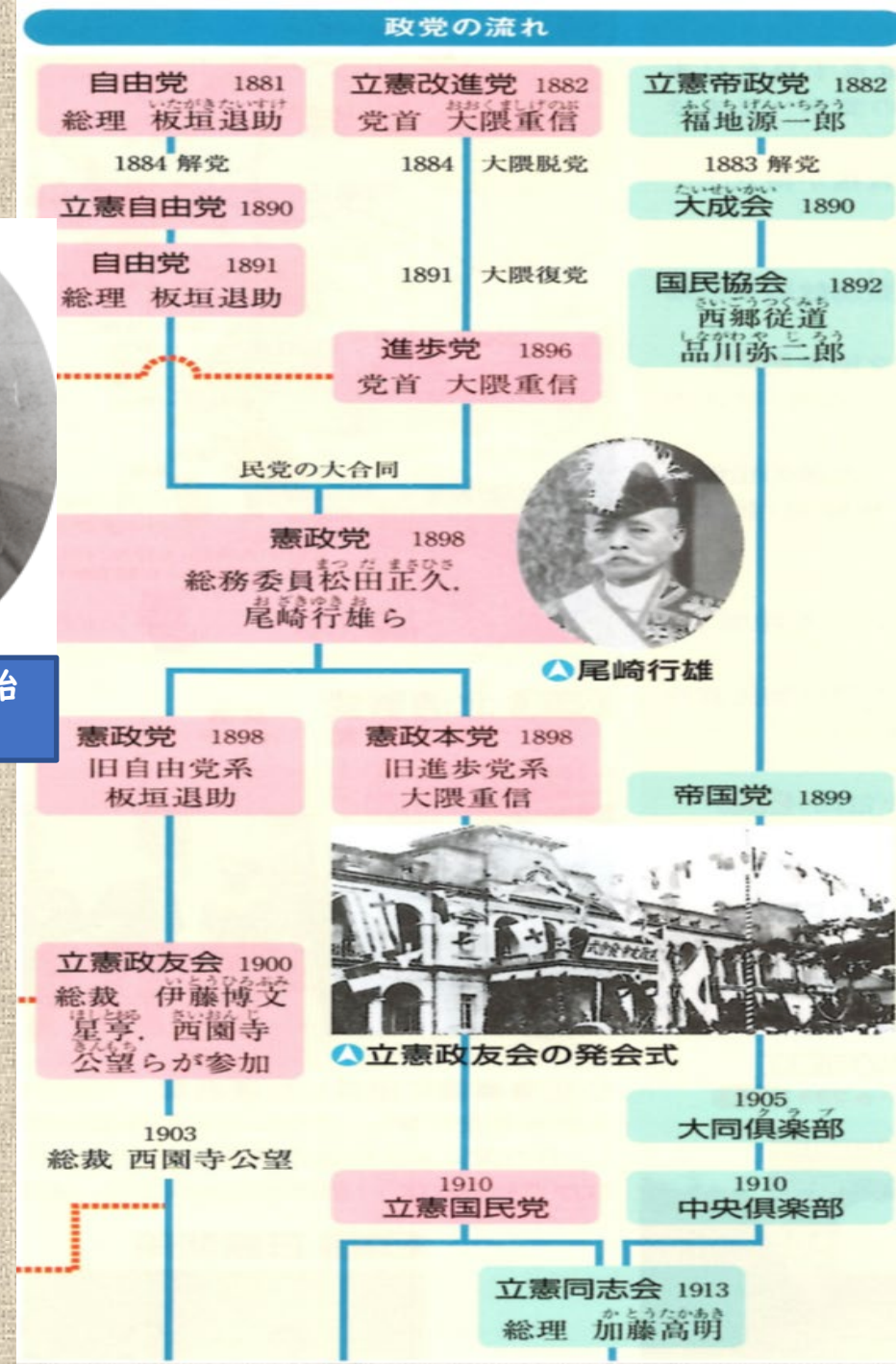
- ① 1900、元老の伊藤博文が結成した政党
- ② 憲政党(旧自由党)は解散、星亨・松田正久ら代議士151人が参加
西園寺・原敬ら伊藤系の官僚も参加
- ③ 1900 第四次伊藤内閣成立
⇒ 山県系官僚の妨害・党内内紛で崩壊
- ④ 1902 衆議院総選挙で多数党に
⇒ 以後、1915まで院内多数派を維持
- ⑤ 1903 伊藤総裁を辞任⇒西園寺総裁に
以後、西園寺と原・松田の三者による党務運営

<特徴>

- ・ 鉄道設置など地方の要望に応える**積極財政**
- ・ **選挙権を持つ地主(地方名望家)**たちの利害を重視
- ・ 衆議院多数派を維持し、**立法権**や**予算承認権**などを武器に二大勢力の一角を占めた。
- ・ 西園寺を首相とする一方、桂とも妥協し**万年与党状態**に



立憲政友会の創始者・伊藤博文



桂園時代の出発

1904桂・原密約

①桂首相の悩み＝講和への過大な期待と不十分な勝利
⇒講和における国民の強い反発への対応が必要

②1904.12桂・原会談

桂首相、政友会の原敬と7回にわたり会談。

⇒桂が後継首班には西園寺を推挙することで合意

- ・次年度の政策、予算は桂内閣が立案
- ・政党内閣と称しない
- ・元老の紐つきを入閣させない

③1905政友会…日比谷焼打事件を黙殺、講和条約を承認

④1906 桂、西園寺を次期首相に推薦

元老の推薦を得ない形ですすめる

⇒第一次西園寺内閣の成立(桂園時代の開始)



原敬（1856～1921）

岩手県生まれ。新聞記者、外務次官、大阪毎日新聞社長を経て、立憲政友会の創立に参画。星亨死亡後、党務・政務などに圧倒的な影響力をもった。のち政友会総裁、首相に。

桂園時代～妥協と暗闘の時代

- ① **第一次西園寺内閣**…桂の禪譲で成立。積極財政をすすめる。
軍部、「**帝国国防の方針**」を作成→内閣に実現を要求
山県派、財政策や社会主義対策の不十分さなどを口実に**倒閣**
- ② **第二次桂内閣**…「一視同仁」策で**反政友会派結集**を図る。
1911 大逆事件以後の難局⇒**政権譲渡**を条件に「**情意投合**」
- ③ **第二次西園寺内閣**…**政友会色の強化**、陸軍二個師団増設問題での**陸軍のボイコット**により崩壊
- ④ **第三次桂内閣**…天皇の政治利用、**新党結成**などへの政友会など政党や国民の反発⇒2か月余で崩壊（大正政変）

☆桂は予算や政策を通すために政友会の力で衆議院を抑え、
政友会は積極政策の実現と多数派維持のため桂を利用
☆他方での暗闘が進行⇒大正政変で衝突。
★原敬の「軍隊的手法」による政友会内部のしめつけ



桂太郎（1848－1913）
山口県生まれ、参謀本部で山
県有朋を補佐して陸軍の軍制
改革に着手。1900年第1次桂
内閣を組織。元老の機嫌をとり、
立憲政友会とは妥協して難局
を切り抜け、その巧妙さは「ニコ
ポン主義」（相手を懐柔するの
意）と評された

桂園時代～「二大勢力」時代

①桂を支持する勢力

山県閥（陸軍、長州閥、（山県派）官僚＝内務省など、

貴族院＝官僚OB）・中央倶楽部（御用政党）

- ・行政・官僚主導の旧来型・能率重視の政治を重視
- ・議会とくに政党政治を嫌う。しかし国民＝議会の同意が必要

②西園寺を支持する勢力

衆議院の多数派＝立憲政友会

- ・議会の多数派による政党政治の実現
- ・議員…財産による制限選挙（地主ら地方名望家の利害を反映）
→産業革命の進展などによりさまざまな勢力の影響も
- ・国民とくに地方名望家の要望重視⇒実現には政府を動かす必要

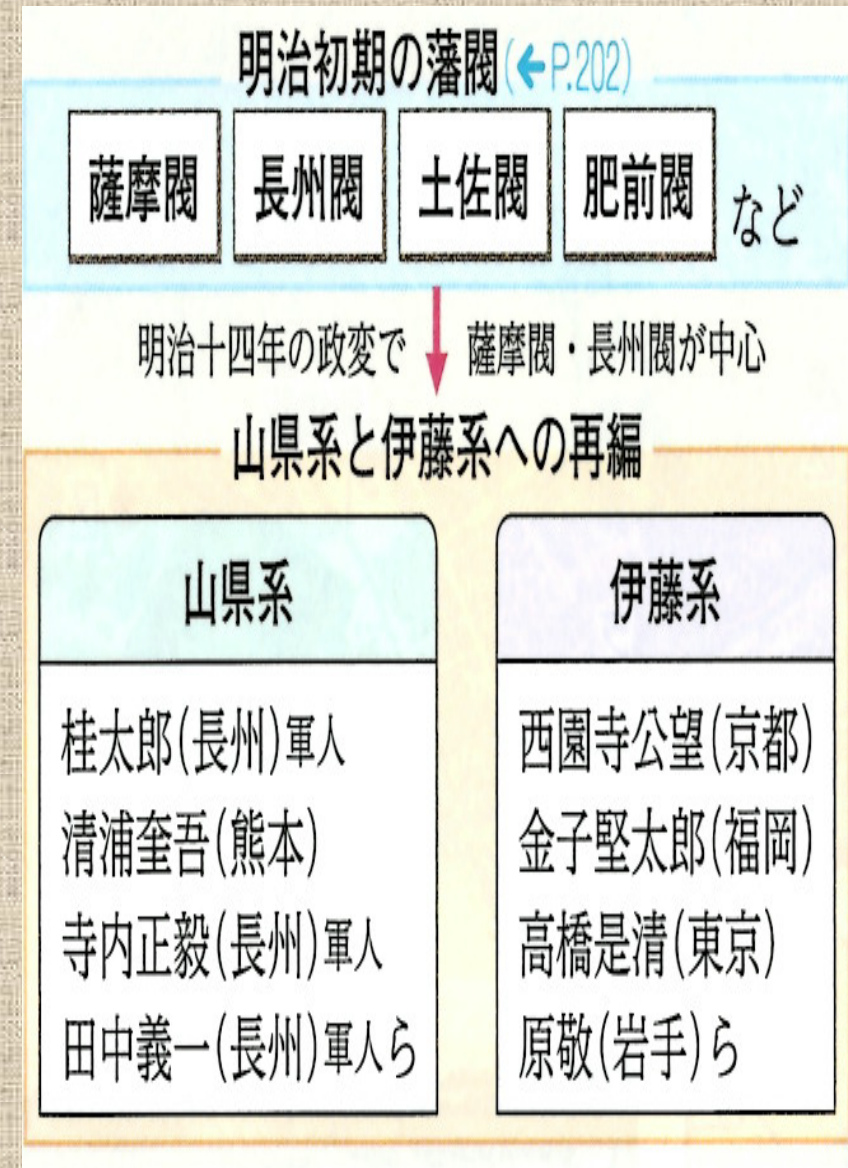
③中間的、ないしその他の勢力

明治天皇（山県・桂に近い？）・元老（伊藤博文？井上馨？）

海軍・薩摩閥、伊藤派などの官僚

憲政本党（→国民党）（←都市の資本家や中間層）

民衆（一般農民・都市下層民）



旧体制の中心

元老・元帥、山県有朋

- ①伊藤博文と並ぶ長州閥のリーダー
- ②大村益次郎の後を受け、西郷隆盛の支持のもとに日本陸軍を創設。軍人勲や参謀本部を設置など軍制を整備するなどの、陸軍のリーダーであり続けた。元帥として陸軍閥のトップである。
- ③内務行政など政務にも携わり、総理大臣を2度歴任、強権的な政策を遂行、伊藤と並ぶ元老の筆頭格となる。
- ④主権線・利益線といった用語で対外関係を判断するなど、日本の対外進出にも大きな影響を与える。
- ④伊藤が立憲政友会の結成に対抗、藩閥官僚の中心として、内務省、貴族院、枢密院、宮中などに影響力を拡大、陸軍と併せ巨大な山県閥を形成し、政党勢力の台頭に対抗した。
- ⑤1909年の伊藤博文の死後も、元老の中心として積極的に政治に介入、「藩閥官僚を中心に行政を中心とした国家を維持しようとし、派閥を形成し権力の維持と拡大に努めた」。
- ⑥用心深く「狡猾」で、自分の勢力拡大につとめる「陰険執拗」で理念などないといふ悪評が多いが、「自分の利害や人気を勘定に入れずやるべきと考えたことを全力でやる愚直な政治家」(伊藤之雄)という評もある。
- ⑦一般には、桂太郎や寺内正毅、清浦奎吾らが山県派の代表とされてきたが、近年は異論も多い。



山県有朋(1838~1922)

山口・萩藩の下級藩士(足軽)出身。吉田松陰の松下村塾に学び、奇兵隊軍監をきっかけに、日本陸軍を創設した。明治・大正の政治・軍事・外交に絶大な権力をふるった。

桂園時代の課題

明治憲法体制の制度疲労と新たなあり方の模索

新しい時代が到来しているにもかかわらず、
古いリーダー（元老・藩閥勢力）が力を持ち続ける。

あらたなあり方の模索(政党政治・民本主義・帝国主義)＝原・加藤高明・桂？

⇔創業の思い（元老・天皇）＋藩閥としての既得権益＝山県・寺内・桂？

憲法体制における権力の多元性という問題が明らかに

- ①「国民代表」としての衆議院(立法権・予算審議権)の勢力拡大
内閣・官僚支配と、衆議院・政党⇒妥協的性格（桂園時代）

原ら政友会指導者は他の政党＝国民党（犬養毅ら）との協力は拒み続ける

- ②軍隊の独走の傾向

⇒一方的な計画（「帝国国防の方針」）の決定

- ③権力の統合の困難さ⇒元老・天皇の高齢化、皇太子の人間的課題

桂園時代＝日露戦後という時期

①「一等国をめざす」目標が実現。これまでのスローガンが通用しなくなった時代。

②農村中心の時代から都市中心の時代への移行期
多様な職業・生き方・価値観をもつ人間が出現。
価値観の中心…「国家」⇒「個人」

③「国民」が国民としての自覚を持ち、参加を求めた時代
「内に民本主義、外に帝国主義」を要求

④社会システムの硬直化
・学歴社会の出現＝立身出世・楽天時代の終焉

⑤軍部の独走が開始されていく時代
→帝国国防方針＝膨大な軍備拡張を要求

⇒旧来の支配層（藩閥＝山県派など）の危機感の高まり

⇒山県と桂の対立？

⇒原ら政友会、新しい時代に即した政治・社会へ漸進的の移行をめざす

軍部の発言力の拡大「帝国国防方針」

◎日清・日露戦争を通しての勢力拡大

植民地・占領地における軍政の実施

「満州」への居座り（事実上の占領継続）→伊藤ら元老との対立

⇒鉄道国有化(1906)・鉄道広軌化要望など

◎**帝国国防方針**(1907)=第一次西園寺内閣

①1907…仮想敵・所要兵力・戦略計画をさだめた最高国策。

②ロシア・アメリカを仮想敵国とする

③陸軍は25師団、海軍は戦艦8隻、巡洋艦8隻の八八艦隊の保有をめざす。

④参謀総長・海軍軍令部長の協議で制定、天皇の裁可を得て内閣総理大臣に下付。

内容は厳秘。

→首相も、統帥権を口実に、部分的な閲覧を許されるのみ。

→他方で、決定事項として財政措置＝軍事費の膨張を求められる。

第一次西園寺内閣…陸軍2個師団/4個、海軍の整備計画進展

政府…「知らないところで勝手に決め、請求書だけもってくる」

戊申詔書と地方改良事業

～締め付けの強化～

① 戊申詔書(1908)

第二次桂内閣（平田内相）のもと出される。

日露戦争後の価値観の多様化に対し、
新たな（古くさい？）国家・道徳目標を提示

⇒ 「一生懸命働いて節約せよ」と命令

② 地方改良事業⇒地方の「自助」をもとめる

- ・これまでの旧町村単位の慣習や財産を行政町村中心に整理・統合⇒「一村一社」運動の強行
- ・米穀検査や蚕種統一など品質向上と生産増加
- ・産業組合による相互金融と共同購入、共同栽培

③ 在郷軍人会などの整備

④ 天皇制の権威維持のための過剰反応

大逆事件(1910)・南北朝正閏論(1911)

⑤ 社会立法＝工場法(1911)

戊申詔書（現代語訳）

今日、人文が日進月歩、世界の列国が互いに協同扶助して、その幸福と利益をともに享受している。朕（天皇）はますます国際的交誼をおさめ、友義をあつくし、列国とともにその慶福を享受しようと思う。

考えると、日進月歩の世界の大勢に遅れないように進み、文明の恵沢を列国と一緒に得ようとするのには、言うまでもなく国家内部の国力増進発展に基礎を置かねばならない。内に国運発展がなくて、なぜ文明の恵沢を享受できるだろうか。

しかるに日露戦争から日も浅く、諸々の政治がますます更張するべき時である。この際、上下国内で心を一つにして、忠実にその業務を励み、勤勉儉約をして財産を治めて信義を守り淳厚な風俗を形作り、贅沢なうわべ飾りを避けて質素にし、心身の緩むことのないように互いをいさめあって、自ら心を励まして活動しなければならない。（下略）

『情意投合』(1911)

～政治における「時代閉塞」～

- ①1911年1月 桂が政友会代議士全員を招待し、政友会の協力への謝意を示す。
- ②桂と西園寺が、両者の関係を「協同一致」を「**情意投合**」と表現
- ②**官僚閥と政友会の協力して、永久に政権を掌握することをめざす宣言**
- ③大逆事件・韓国併合・南北正閏論など意見が分かれる議題で桂を援助
- ④政友会以外の政党から政権に就く機会を奪おうとした面ももつ。

⇒『時代閉塞の現状』

1910年8月、石川啄木の評論。大逆事件が発覚した時期、自然主義文学に対する批判であるが、明治末年「強権」が権力だけでなく社会組織として青年層が十重二十重に取り囲まれている状態をよく表現している。

石川啄木「時代閉塞の現状」

彼は、「教育とは時代がその一切の持つところのものを提供して、次の時代のためになす犠牲だ」ということを知っています。しかしこんにちにおいては、教育はただその「今日」必要な人物を養成するだけのものにすぎなくなっています。そうして、彼が教育家としてなしうる仕事は、教科書の一から五までを一生繰返すか、あるいはその他の学科のどれもごく初歩のところを、毎日毎日死ぬまで講義するかだけの事です。(中略)

日本には今、「遊民」という不思議な階級が、次第にその数を増しつつあります。今やどんな僻村へ行っても、三人か五人の中学卒業者がいます。そうして彼らの仕事は、父兄の財産を食い減すことと、むだ話をするだけです。

わたしたち青年を取り囲む空気は、今やもうすこしも流動しなくなりました。強権の勢力は、あまねく国内に行わたっています。現代の社会組織はその隅々まで発達しています。——そうしてその発達がもはや完成に近い程度にまで進んでいることは、その制度の有している欠陥が、日一日明白になっていることによって知ることができます。

(超訳!：日比嘉高)

桂園時代とは何か（鹿野政直による）

日露戦後の明治政府には二つの可能性があった。

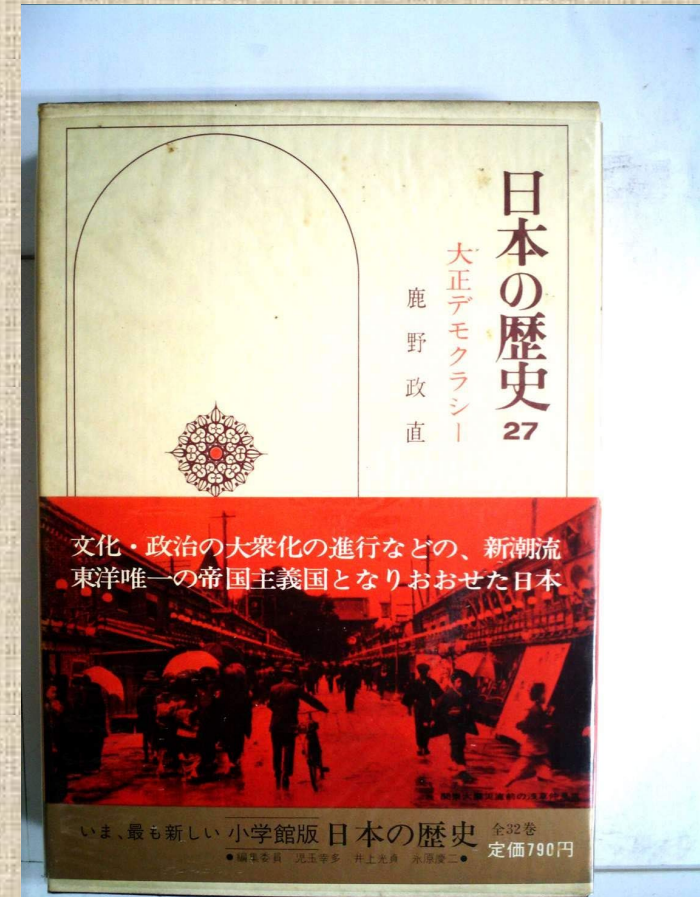
- ① 国民の減税への要求をいれ、民富の蓄積をはかり、抑圧をゆるめて自由を拡大していく可能性。
- ② あくまでも帝国の「栄光」を第一義として負担をそのままにして、国権拡張をすすめる道。

そのなかに二つの方策が存在。

1) 軍備拡張至上主義

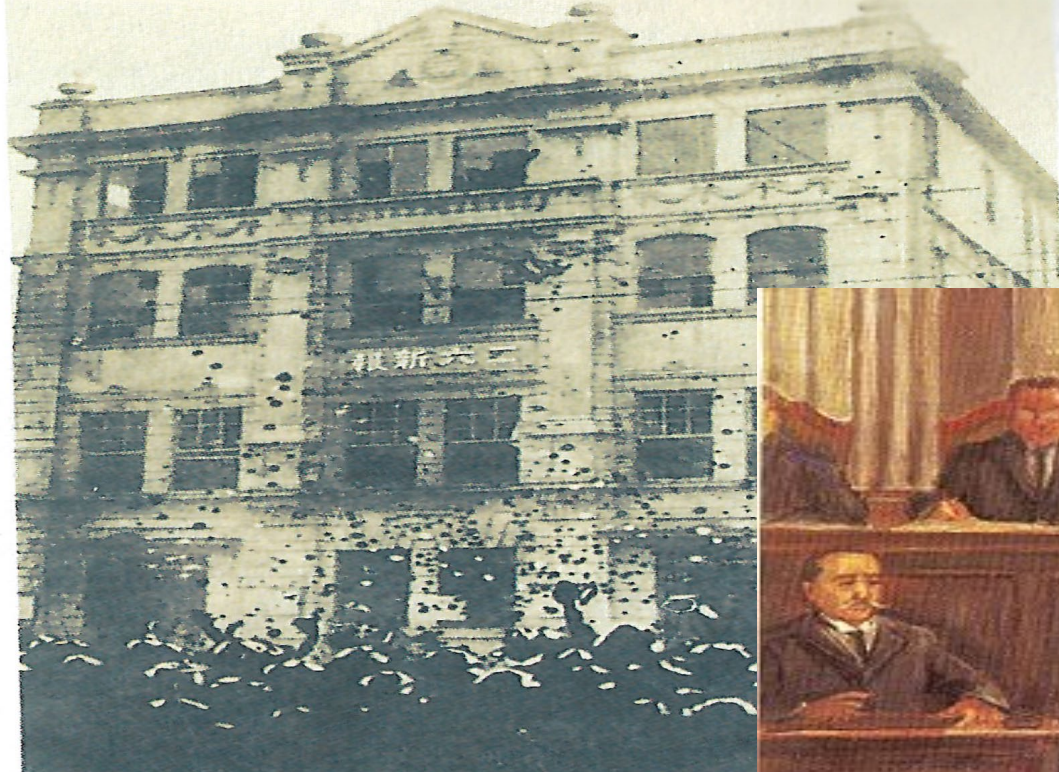
2) 産業基盤を整備することで国力を増進する
＝部分的に民意を代弁

桂園時代…第一の可能性を取らず、第二の可能性の二つの方策の妥協と抗争という形で進行した。



鹿野政直
「日本の歴史27大正デモクラシー」（小学館1976）

Ⅲ、大正政変とシーメンス事件 ～民衆運動の政治過程への登場～



護憲運動で新聞社を襲撃する民衆



桂首相による天皇の政治利用を批判する
尾崎行雄



シーメンス事件に抗議すべく集
まった民衆

「国民」の不満～重税への怒り

①桂園時代の財政構造（1907年度歳出）

- 1)国債費の負担の大きさ=29%
- 2)軍事費=33%
- 3)植民地経費=3.3%
- 4)積極財政にかかわるインフラ整備など=13%

②軽減されるどころか、増えていく税負担*

=戦時特別税の恒久化・営業税などの負担増

③農業への課税(地租)から都市・民衆への課税へ

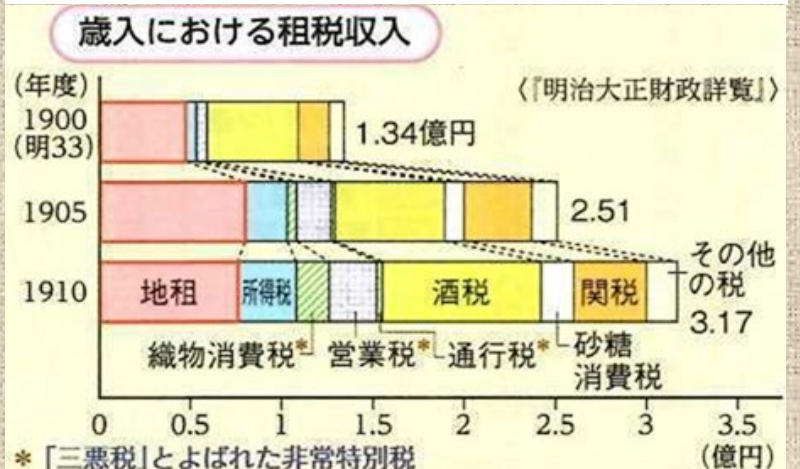
=地租減税の一方で、営業税などは減税なし

④不況の深刻化=緊縮財政か、公債発行か

さまざまな要求

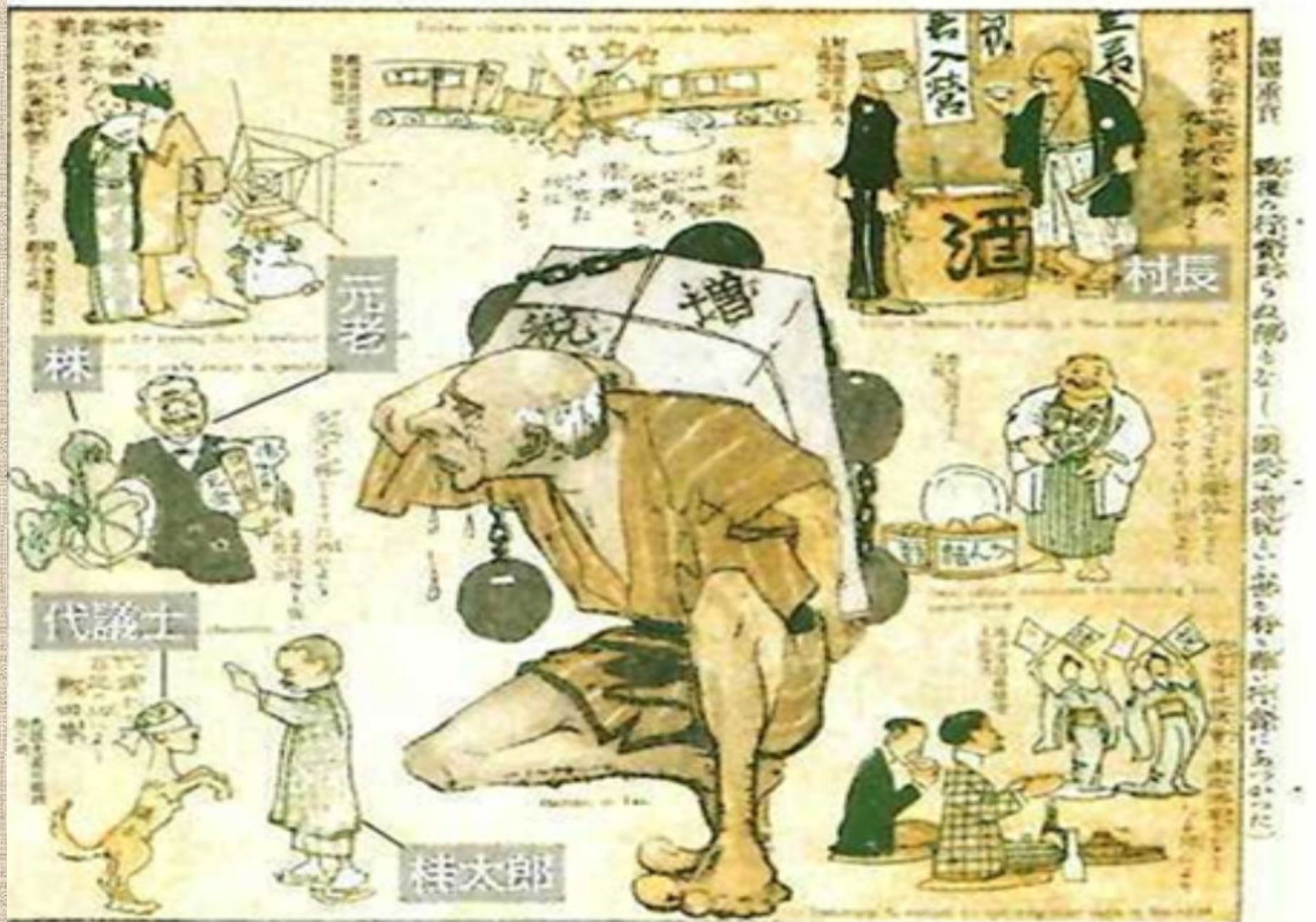
- 1)大資本…国家債務の縮小
- 2)都市名望層・都市民衆…三悪税反対・値上反対
- 3)地方名望家…地租減税と鉄道など積極財政
- 4)海軍…八八艦隊に向けての艦隊整備
- 5)陸軍…朝鮮への常備二個師団増設

1907 年度歳出	単位：万円	割合(%)
鉄道の拡張	2290	(3.8)
郵便電話の拡張	2710	(4.5)
製鉄所の拡張	650	(1.1)
土木治水・港湾	750	(1.2)
国有林野経営	510	(0.9)
産業補助奨励	1150	(1.9)
植民地経営	1970	(3.3)
{ 台湾・朝鮮	(1490)	
{ 満州・樺太	(480)	
小 計	1 億 0030	16.7
国債費 (借入金返済・利息支払い)	1 億 7650	29.3
軍事費	1 億 9832	32.9
その他	1 億 2728	21.1
合 計	6 億 0240	100.0



嗚呼、増税 『東京パック』1908

国債費・軍事費・植民地経営費などの必要から、一般民衆の課税はさらに強化された。この図では、戦争で元老や代議士らが利益を得たのに、国民は増税だけを与えられたと風刺している。



第二次西園寺内閣

- ① 1911年8月成立…政友会からの入閣四名、**親政友会系**も多く、桂からの要望は拒否。
- ② 1912年7月
明治天皇死亡⇒大正天皇即位（大正時代に）
⇒「**新しい時代の到来を予想させる**」
- ③ **不景気の進行と対外債務の累積＝財政危機に**
財政緊縮・国際収支改善(山本蔵相)をすすめる。
海軍・薩摩閥に接近(西園寺)⇒海軍拡張を承認
陸軍の要望は見送り
原らの伝統的な積極財政(鉄道道路整備)と対立
⇒党内対立の発生
- ④ 陸軍の強硬な2個師団の増設要求
＝ **2個師団増設問題**発生
⇒ **1912年、第二次西園寺内閣崩壊**



行財政改革をモットーとする西園寺内閣が、陸軍（寺内正毅）、海軍（山本権兵衛）の予算要求に直面している様子を描いた風刺絵。（「東京パック」1912年7月号）

二個師団増設問題（1912年）

- ①帝国国防方針、陸軍の増設目標を平時25個師団に。
- ②1907年、二個師団増設、他は財政難で増設見送り。
他方、海軍は建造をつづける
- ③第二次西園寺内閣…行財政整理による減税と海軍充実
- ④**陸軍、二個師団の増設を強硬にもとめる。**
 - ・シベリア鉄道の複線化の進捗に伴うロシアの脅威
 - ・辛亥革命による中国情勢の変化
 - ・韓国併合にともなう常設師団の駐留
- ⑤内閣…財政難・行財政整理・日露協約の存在⇒拒否
世論も内閣に同調＝増師反対大会も開催。
- ⑥12/2 **上原陸相の単独辞職、陸軍は公認を推薦しない**
⇒第二次西園寺内閣総辞職
- ⑧総辞職に対する世間の同情と陸軍・藩閥勢力への反発
＝「**陸軍の横暴**」「**内閣毒殺**」との声たかまる
- ⑨第一次憲政擁護運動の発生＝大正政変へ

国防所要兵力の策定(1907)

陸軍…現有17個師団を25個師団に
海軍…戦艦8隻・そうこうじゅうかん装甲巡洋艦8隻
(八・八艦隊)
露・米・独・仏を仮想敵国とする

経過

- ①1911年までに陸軍は2個師団、海軍は戦艦4隻・巡洋戦艦4隻建造
- ②1915年第2次大隈内閣、懸案の2個師団増設案が議会通過(→P.249)
- ③1918年改定。露・米・中を仮想敵国
- ④1922年ワシントン海軍軍縮条約で主力艦(戦艦・巡洋戦艦)10隻となる

第三次桂内閣と護憲運動発生

- ① 12月6日～ 元老会議…次期首相の推薦工作難航
⇒ 14日、山県ら内大臣の桂太郎を推薦・受諾。
- ② 「勅語」による組閣（12/21）**天皇の政治利用**
⇒ 17日、勅語で内大臣辞職、21日、勅語で海相留任
- ③ 反対運動の発生、新聞・雑誌を通して拡散
尾崎行雄（政友会）**犬養毅**（国民党）ら国民大会開催を決定。
12/19日憲政擁護大会＝「閥族打破、憲政擁護」
→ 以後、全国各地で開催される（国民運動化）
- ④ 桂、**新党結成**による対抗＝国会の多数派形成を図る
⇒ 多数派工作に失敗
- ⑤ **政友会中央、本格的な倒閣運動に**
⇒ 内閣不信任決議案提出
尾崎行雄「玉座」演説



「彼等は常に口を開けば直ちに『忠愛』を唱へ、恰も忠君愛国は自分の一手専売の如く唱へて居りますが、その為す所を見れば、常に玉座の蔭に隠れて政敵を狙撃するが如き挙動を執って居るのである（拍手おこる）。彼等は、玉座を以て胸壁と為し、詔勅を以て弾丸に代へて政敵を倒さんとするものではないか。此の如きことをすればこそ、身既に内府に入って未だ何も為さざるに当りて、既に天下の物情騒然として却々静まらない。…又、その内閣総理大臣の地位に立って然る後政党の組織に着手するといふが如きも、彼の先輩が如何に我憲法を軽く視、其精神のある所を理解せないかの一斑である」

尾崎行雄の内閣不信任案の代表説明の様子と、その内容

護憲運動と大正政変

- ① **護憲運動の全国化**…2/1大阪（2～3万）2/5民衆数万人
- ② 内閣不信任決議案提出、尾崎行雄「玉座」演説
- ③ 2/9桂、西園寺に**詔勅**⇒政友会の沈静化要求。
⇒政友会首脳・拒否。不信任案採決に向かう。
数万の民衆が議院を包囲
⇒海軍・薩派の山本権兵衛が桂を訪問して面罵
- ④ 衆議院議長大岡育造の説得で桂・総辞職を決断
⇒2/11、**第三次桂内閣崩壊**
- ⑤ **民衆の暴徒化＝日比谷事件の再来に**
⇒2/10～11警官と衝突、国民・都・やまと・二六などの各新聞社や警察署・交番が焼き打ち。軍隊が出動した。
⇒地方波及…大阪、神戸、広島、京都など
- ⑥ 2/20**第一次山本内閣の成立＝政友会は与党に**
尾崎行雄ら離党＝政友倶楽部

- ・ 民衆の力が内閣を倒した日本史上まれな事件
- ・ 詔勅の乱発→天皇の命令＝権威の低下に



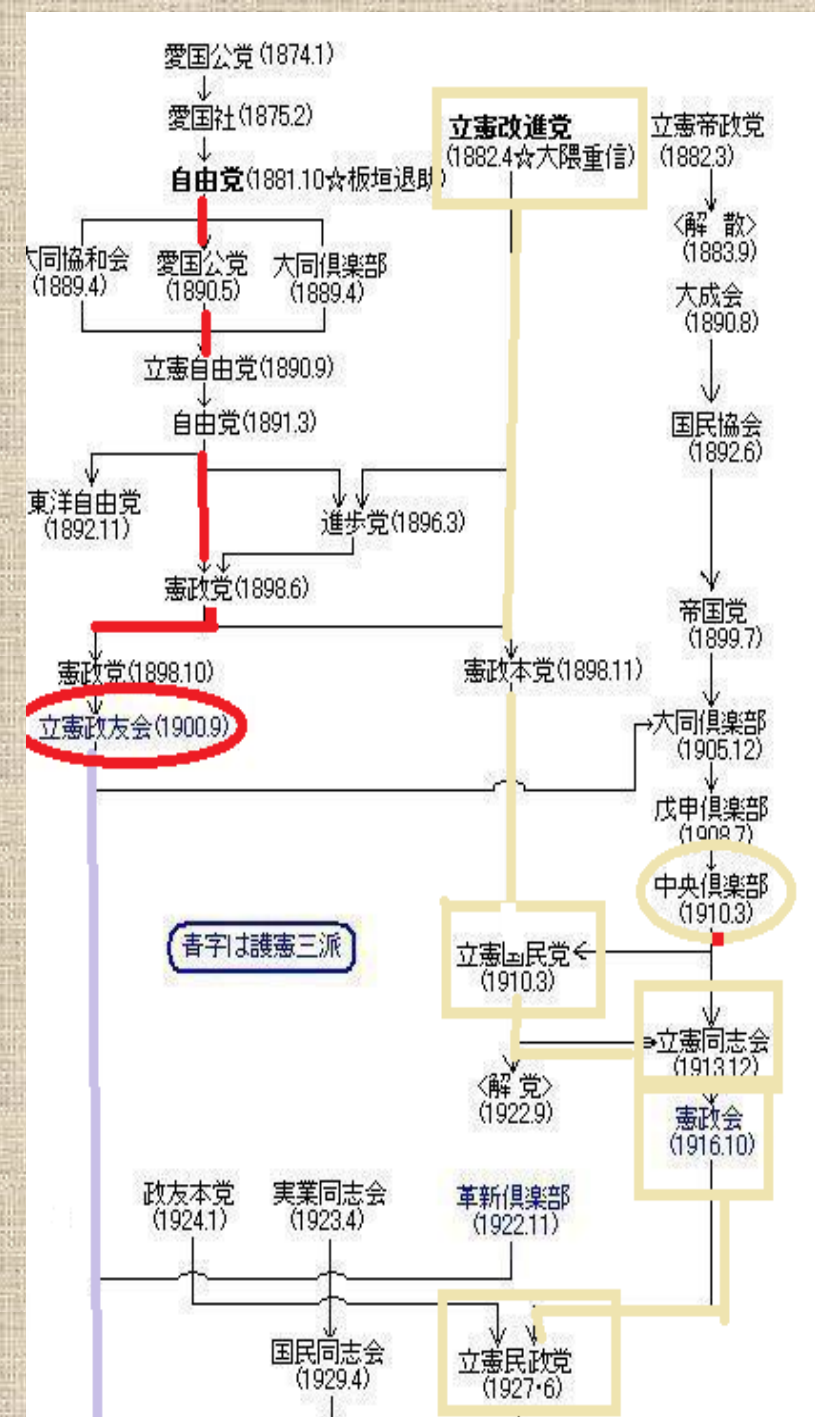
上：犬養毅(左)と尾崎行雄（右）憲政の二神と呼ばれた
下：国会周辺に集まった民衆



桂新党＝立憲同志会

- ① 1913年1月、**桂太郎首相、新党計画を発表**
- ② 国民党分裂⇒大石正巳・河野広中ら改革派参加、代議士の約半数
中央倶楽部（桂与党）の全員参加＝大浦兼武(桂・山県派のボス)ら
桂系官僚の後藤新平・若槻礼次郎・浜口雄幸らも参加
政友会の切崩しは失敗・山県派貴族院議員も当面は不参加。
- ③ 2月7日、桂、立憲同志会を宣言、総辞職後発病10月死亡
- ④ 12月**立憲同志会**結党。
加藤高明総理、総務は大石・大浦・河野⇨後藤らは脱落
- ⑤ 山本内閣のときシーメンス事件攻撃を展開
- ⑥ 第二次大隈内閣の与党に、加藤は副総理格・外相で入閣
- ⑦ 1915年総選挙で大勝、第一党となる。
- ⑧ 1916年、反政友会の中正会・交友倶楽部と合同
⇒**憲政会（のち立憲民政党）**結成

立憲改進黨(大隈ら)の流れ、都市ブルジョワ
ジーに影響力、のちの憲政会(立憲民政党)



山本権兵衛内閣(1913~14)

- ①山本権兵衛…**海軍**の実力者、薩摩閥の中心人物
⇒長州閥、陸軍閥にかわる「**閥族のルール**」で**首相に**
- ②**政友会の協力**をえる＝**桂園時代再来？政友会の裏切？**
 - 1)首相および陸・海・外の四大臣以外は政友会員
 - 2) 政友会の主義主張による内閣運営、3)行政整理の断行政友会と薩摩閥の野合への長州閥（井上馨・山県ら）反発
- ③**主な政策**
 - 1)軍部大臣現役武官制の廃止＝予備役・後備役も可能に
 - 2)文官任用令の改正＝次官や警視總監らは自由任用に
 - 3)行政整理の断行 合計5300人の大幅な定員減
 - 4)軍備拡張は陸海軍とも凍結
- ④**シーメンス事件**＝**海軍高官による大規模な収賄事件**
 - 1)同志会らの追求、**言論界・院外民衆の運動の活発化**
 - 2)**内閣弾劾決議案は政友会が否決**、予算案も衆院通過
 - 3)**貴族院、海軍予算削減⇒最終的には全予算案否決**
- ⑤**1914年3月、山本内閣崩壊**



山本権兵衛（1852－1933）
鹿児島出身。海軍大將
海軍の改革を進め、日清・日
露戦争での作戦を統括。海相
を歴任、1913年首相となる
がシーメンス事件で辞職。海
軍閥・薩摩閥の中心。

シーメンス（ビッカース）事件(1914)

- ①1914（大正3）年1月、外電で、軍艦など兵器輸入にかかわり、ドイツの**ジーメンス社からの贈賄**が判明
- ②さらに戦艦「金剛」の建造にかかわるイギリス・**ビッカース社からの多額の贈賄**も。
- ③島田三郎、尾崎行雄、犬養毅らに率いられた立憲同志会ら野党三派による国会での追及。
- ④1915年2月、日比谷で催された内閣弾劾国民大会の**群集が議会を包囲**、軍隊も出動⇒議院の内外で山本内閣糾弾の運動が高まる。
- ⑤3月海軍大拡張費を含む**予算が貴族院で不成立**となり、山本内閣は総辞職に。

世論は反山本、議会多数派（政友会）は親山本
世論が議会に反映しないのは選挙制度が原因！



座礁した軍艦「内閣丸」
シーメンス事件という「岩」で座礁。船首には山本、マストには斎藤海相、船尾にいるのは原か。

IV、第一次世界大戦の中で ～大隈・寺内内閣と外交～



左から大隈重信・山県有
朋・寺内正毅

第二次大隈内閣の成立

①元老会議の混迷

⇒いったん貴族院の清浦奎吾に。海軍・政党の反対で挫折。

「超然内閣より嘲笑内閣」(尾崎)

②大隈重信(77歳=山県と同年齢)に組閣を命じる

「超然内閣を拒否した護憲運動の勝利」との当時の評価

「陸軍・海軍・政友会・貴族院の四大勢力がすべて政治的に傷つくという真空状態で生まれた内閣」(坂野潤治)

大隈は立憲同志会などの裏のオーナーでもある。

③元老の大隈への期待=国民の強い期待

1)二個師団増設など軍拡の実現

2)力を持ちすぎた裏切者、政友会の「退治」

④第三次桂内閣のメンバーが中心、立憲同志会など 旧立憲改進黨系を与党とする事実上政党内閣

⑤1914年7月、第一次世界大戦勃発



大隈重信(1838-1922)佐賀出身
維新後、大蔵卿、参議など重職を歴任。秩禄処分、地租改正などを推進した。明治十四年の政変で官を辞し、立憲改進黨を結成し、総裁。31年日本初の政党内閣を組織。大正3年第2次内閣を組織。

第一次大戦への参戦

① 1914年7月 第一次大戦発生

⇒イギリス、日本への援助要請

② 加藤外相、対独参戦を主張⇒8日、参戦を決定

1) イギリスとの「同盟の情誼」

2) ドイツ根拠地を一掃することによる日本の利益

⇒イギリス…宣戦布告をみあわせるよう要請⇒無視

⇒元老への通知は決定後＝山県らの反発

※山県らは参戦には懐疑的、原（＝政友会）も否定的

③ 8/23 日本の対独宣戦＝ドイツ側の拠点の占領

1) 山東省・膠州湾のドイツを攻撃

11/7 青島のドイツ軍降伏

2) 内陸部の濰県・済南を占領、膠済鉄道確保

3) 10月、南洋群島を占領

大隈内閣＝加藤外相は戦争を利用して、対中国の課題
解決と中国進出という火事場泥棒的行為をすすめる



上：山東半島への上陸作戦

下：青島陥落を祝しての花電車



対中強硬姿勢＝21か条要求

①大戦前からの中国との懸案事項

関東州（旅順・大連）の租借期限

1898年から25年（1923年まで）

満鉄の営業期限延長問題

1903年から36年（1939年まで）

②対独開戦⇒山東省の膠州湾・膠済鉄道を確保

③1915/1 対華21か条要求を提出⇒袁世凱政権

中国に対する強圧的な要求と内政干渉

1) 山東省のドイツの利権の引き渡し

2) 関東州・満鉄の期限延長

3) 日本人顧問の雇用、警察を日中合同など（五号）

④中国側の強い反発

五号(秘密交渉としていた)を世界に公表

⇒各国の日本への不信感、とくにアメリカの反発

⑤最後通告を出し、五号以外の受諾を強要する。

以後、中国にとって「最大の敵」は日本となる

第1号、山東省に関するもの。

- (1) ドイツが有する一切の権利および利益の処分については、日本とドイツの協定に従うこと。
- (2) 沿岸と島嶼の不割譲不貸与。
- (3) 芝罘または竜口と膠済鉄道とを連絡する鉄道敷設権の譲与。
- (4) 主要都市の開市。

第2号、南満州および東部内蒙古関係。

- (1) 旅順と大連の租借権および満鉄と安奉鉄道の買戻権の99年延長。
- (2) 農耕および商工業のための土地所有権と賃借権の取得。
- (3) 居住、往来および商工業の自由。
- (4) 鉱山採掘権供与。
- (5) 他国人への鉄道施設権の供与ならびに鉄道新設に必要な資金導入に関する日本の事前同意。
- (6) 政治財政軍事顧問採用の際の事前協議。
- (7) 吉長鉄道の管理経営権の99年間委任。

第3号、漢冶萍公司に関するもの。

- (1) 同公司の日中合弁およびその権利財産の処分についての事前同意。
- (2) 同公司の同意なしに付近の鉱山を採掘することの不許可。

第4号、中国沿岸の港湾および島嶼の不割譲および不貸与。

第5号、中国全土にわたる要求。

- (1) 中央政府への日本人の政治財政軍事顧問僱聘。
- (2) 日本人の病院、寺院および学校の土地所有権。
- (3) 警察の日華合弁もしくは多数の日本人警察官の僱聘。
- (4) 日本からの半数以上の兵器受容もしくは日中合弁の兵器廠設立。
- (5) 武昌と九江―南昌線に連絡する鉄道および南昌と杭州、南昌と潮州をむすぶ鉄道敷設権供与。
- (6) 福建省における鉄道、鉱山および港湾の設備に外貨を導入するさいの事前協議。
- (7) 日本人の布教権。

大隈内閣の崩壊

①大隈内閣・加藤外相の強引で独断的な外交への反発

1) 1914年 大戦への参戦を内閣のみで決定

2) 袁世凱政権に対する「21か条要求」

= 中国側の怒りや国際社会への配慮欠如

②1915年総選挙で大隈与党(立憲同志会など)の大勝

「大隈人気」= 国民の強い支持・ポピュリズム的性格

大浦内相による選挙干渉 (←元老・井上らの資金提供?)

⇒ 衆議院多数派を政友会から奪う

大隈による「政友会退治」の実現

③選挙の大勝と大戦景気⇒二個師団増設など軍拡を実現

④大選挙干渉の発覚⇒内閣改造に(大浦・加藤ら閣外に)

⑤元老らの不評…内閣独走=元老軽視、外交政策。

・ 中国との対立・反発拡大

・ 対米対立激化、英仏の対日不信

⇒ 山県ら元老ら、大隈内閣の退陣を迫る

⇒ 1916大隈、加藤高明への禅譲に失敗、退陣へ



大隈退陣

政友会退治と二個師団増設・海軍増強という役割を果たした大隈は、元老・山県派らによって追い出された。

北澤楽天の戯画。上から双眼鏡で見ているのは寺内正毅か。

寺内正毅内閣(1916~18)

①寺内正毅内閣の成立「ビリケン（非立憲）」内閣*

陸軍・長州閥、山県派の直系

「挙国一致」…政友会・憲政会などとの等距離

超然主義＝政党の協力は弱い(政友会の閣外協力)

②臨時外交調査会…外交での挙国一致をめざす

原も参加…政友会＝是々非々主義で対応

③中国干渉政策を継続

→軍閥（段祺瑞）への大量の借款供与＝西原借款

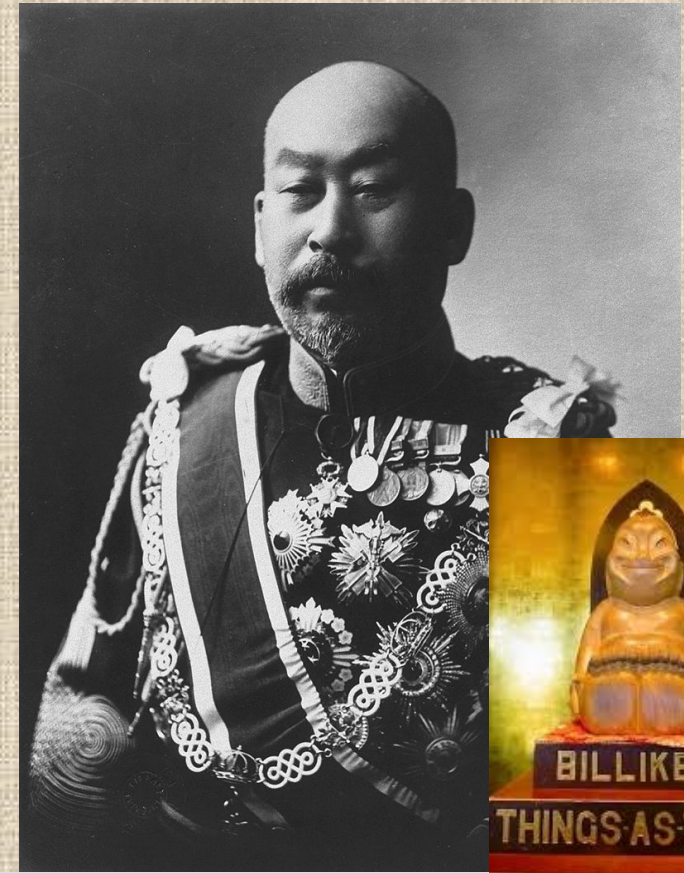
④「シベリア出兵」(1918~22~25)の開始

→最大7万3000の陸軍派遣，バイカル以東のシベリアを占領

→完全な失敗＝敗北に終わる。

⑤インフレ対策に失敗＝米騒動の発生

→責任を取って退陣



寺内正毅(1852-1919)
山口県出身 軍人、政治家。
明治35-44年陸相をつとめ、43年初
代朝鮮総督をかねる。大正5年元帥
となり超然内閣を組織するが、シベ
リア出兵による米騒動などで、7年総
辞職した。
ビリケン内閣と呼ばれた

シベリア出兵(1918~22・25)

- ①1917年 ロシア革命→社会主義ソヴィエト成立
- ②米・英・仏…革命干渉を目的に出兵(革命干渉戦争)
- ③日本の陸軍・外相も出兵をめざす

- ・天皇制という国体とあいられない存在を嫌う
- ・日本の勢力圏を北満州からシベリアに拡張する機会

- ④多くのメディア＝出兵支持(←大阪朝日厳しく非難)
反対…原敬や牧野伸顕ら、山県も危惧

国際協調の視点/軍需品の補給・軍資の調達などへの懸念

- ⑤1918/8 アメリカ出兵決定⇒7000名派遣を提議
⇒陸軍・外相、大規模派遣決定⇒18/8**出兵開始**

最大7万3000の大軍を派遣、バイカル以東のシベリアを占領(シベリア出兵)。

- ⑥米・英軍撤退後も駐兵、尼港事件発生(日本人の大量殺害事件)
- ⑦革命軍の反撃⇒劣勢に、国内の反対、列国の非難⇒**1922撤兵、北満州1925**
- ⑧25年日ソ国交樹立で北樺太からも撤退
- ⑨戦費約10億円、死者は3000人。



シベリアの兵士たち。凍結した酒の配給

「ソビエト人民の敵意と列国の不信を買った日本帝国主義の完全な敗北」 由井正臣

米騒動と寺内内閣退陣

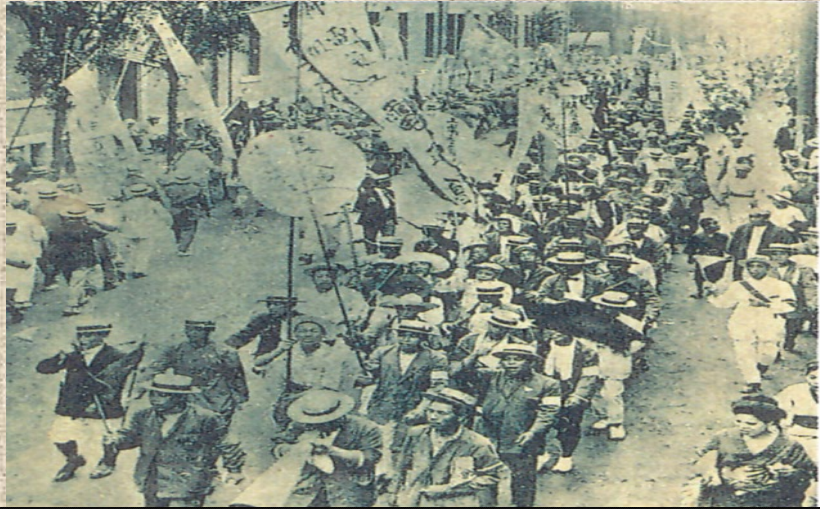
- ① **大戦景気によるインフレ＝物価の急上昇**
⇒政府、適切な対策とれず
⇒シベリア出兵にともない**米価の狂騰へ**
- ② 1918/7富山県の女性たちの米の県外輸送
阻止行動発生
- ③ 新聞報道をきっかけに全国で**米騒動**発生
米の廉売要求
⇒打ちこわし、略奪、焼き打ち、乱闘に
1道3府38県に拡大
当局推計約70万人参加 **実際ははるかに多い**
- ④ 各地で軍隊が出動
- ⑤ 18/9/21 **寺内内閣総辞職に**
⇒9/26 **政友会総裁の原敬、後継首相に**

寺内内閣は国民とメディアの力で
辞職を余儀なくされ、原内閣が実現。



V、原敬内閣

～日本初の本格的政党内閣



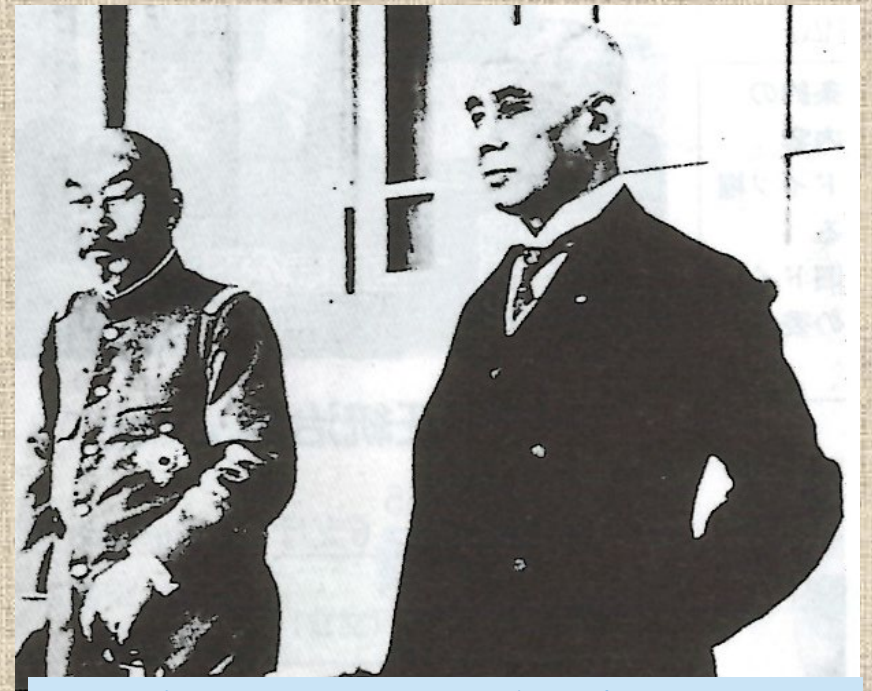
原敬政友会内閣成立(1918)

- ①米騒動の全国化⇒寺内内閣退陣
- ②山県、西園寺の推薦の形で原を首相に推薦
- ③陸・海・外をのぞく全大臣を政友会員が占める
本格的政党内閣

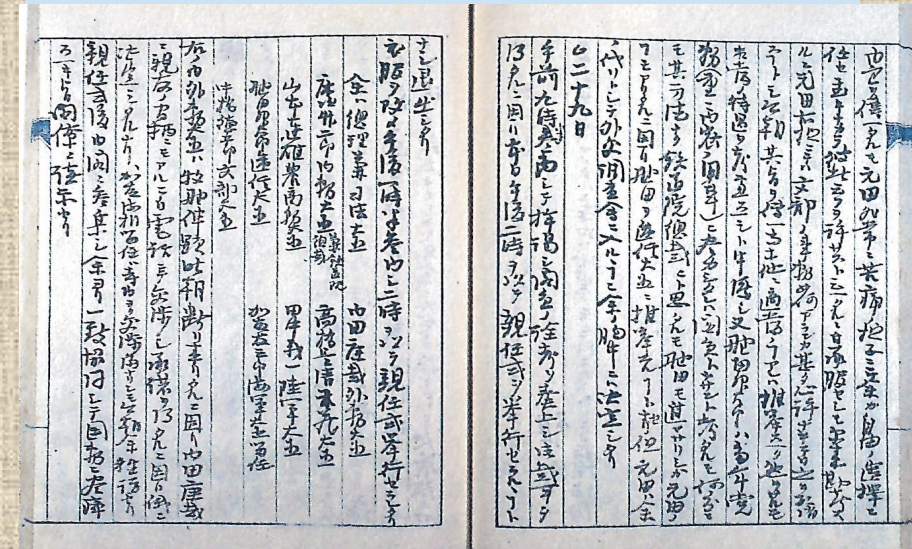
現役の衆議院議員、平民・非藩閥の総理大臣
⇒とはいえ、当時の言論界では評判が悪い！

総辞職に追い込んだのは、米騒動に象徴される民衆の不満の爆発であり、新聞の政府批判であった。(略)政治的プロフェッショナルたちのなかでの駆け引き・思惑を超えた、政治的にはアマチュアの人びとの声が牽引力となって実現したのである。(武田晴人「帝国主義と民本主義」)

- ④「四大政綱」による積極的財政支出
⇒鉄道網の建設などのばらまきと、大軍拡
- ⑤社会政策による再統合＝「福祉国家」的側面も
- ⑥普通選挙法獲得運動に敵対
⇒政友会に有利な選挙法を利用＝大勝



上：寺内から引き継ぎを受ける原敬
下：原敬日記



原敬内閣への期待

①「原敬は、歓呼の声をもって、国民に迎えられた。

しかしながら、それは原敬の経綸手腕に期待したというわけではなく、多くは平民宰相、準政党内閣の出現を歓迎したのとどまる」

(前田蓮山『原敬伝』)

②米騒動を引き起こした寺内内閣とその黒幕としての山県への反発

⇒それからの脱却を原に寄せた＝政党内閣への期待

③メディアが一斉に原内閣成立を歓迎

④元老・山県の前への姿勢

「自身の派閥の政治的神通力の衰退を悟り、原に猜疑心を抱きながらも、側面から援助していた。」(金原左門)

全国の新聞・雑誌の歓迎
記事約300本にみる原内
閣への期待

- 1, 立憲政治
・ 政党政治の徹底
- 2, 社会政策の実行
- 3, 労働組合の自由の公認
- 4, 選挙権の拡張
- 5, 物価調整
- 6, 民意の尊重の保障
(雑誌『法治国』)

原敬(はらたかし1856~1921)

- ①南部藩重臣の次男。分家にさいし士族を離脱、平民身分に。
- ②1871年に上京、1876年に司法省法学校を3年で退校
- ③『郵便報知新聞』『大東日報』の記者を経て1882年外務省に。
- ③井上馨、陸奥宗光に見込まれ、農商務省参事官・外務省通商局長を経て外務省次官、朝鮮駐在公使を最後に外務省退官
- ④『大阪毎日新聞』の社長に就任。
- ⑤1900年立憲政友会に参画、第四次伊藤内閣の逋相。
- ⑥1902年盛岡市から代議士に当選、以後連続当選。
- ⑦1903年西園寺公望総裁の下、松田正久と政友会の実権を握る。
- ⑧北浜銀行頭取、古河鋳業副社長。財界でも地歩を築く。
- ⑨長州閥の桂太郎に接近し「桂・園」時代を演出。
- ⑩第一次・第二次西園寺内閣内相。長州閥に対抗。
- ⑪大正政変を経て第一次山本権兵衛内閣内相
- ⑫1914年政友会総裁に就任、1917年の総選挙では第一党に
- ⑬翌1918年夏の米騒動で原内閣が誕生



原敬(1856~1921)

岩手県出身、戊辰戦争で敗れた南部藩出身であったことを意識し、当時の「白河以北、一山百文」という奥羽地方への差別に抗い「一山」と号す。爵位も拒否し、平民としての生涯を全うした。

原内閣の積極主義～四大政綱

- ① 「**教育機関の改善充実**」…中等・高等教育の充実
高等学校10校、実業専門学校17校、専門学校2校
学部増設、私立専門学校を大学に
- ② 「**交通機関の整備**」＝鉄道・道路・港湾の拡充
鉄道院を鉄道省に昇格
- ③ 「**産業及び通商貿易の振興**」
産業発展のための諸施策
企業合同・補助金奨励金公布・関税引き上げなど
都市計画法、市街地建設法→都市整備の振興
- ④ 「**国防の充実**」
海軍八八艦隊の建造、陸軍21個師団、軍備の近代化

大戦景気による税収増を背景にした積極主義
国民生活・国民福祉が重要な課題に。



慶應義塾大学本館

これまでの私立の専門学校がつぎつぎ大学として認可されるようになった。1920年慶應義塾大学も早稲田大学と共に、正式な大学となった。

地域振興の積極政策？ 民衆切り捨てる金持ち内閣？

「地域」＝有権者？に応える積極的財政支出拡大
＝バブル化・インフレの要因となる

①鉄道敷設法＝149の新路線建設(従来の鉄道路線を倍増)

⇒**鉄道は文明を全国民へ普及させると主張**

cf.後藤新平ら**鉄道広軌案＝高速・大量の移動を可能に**

②鉄道、道路、港湾、堤防などの整備⇒**地方名望層が対象**

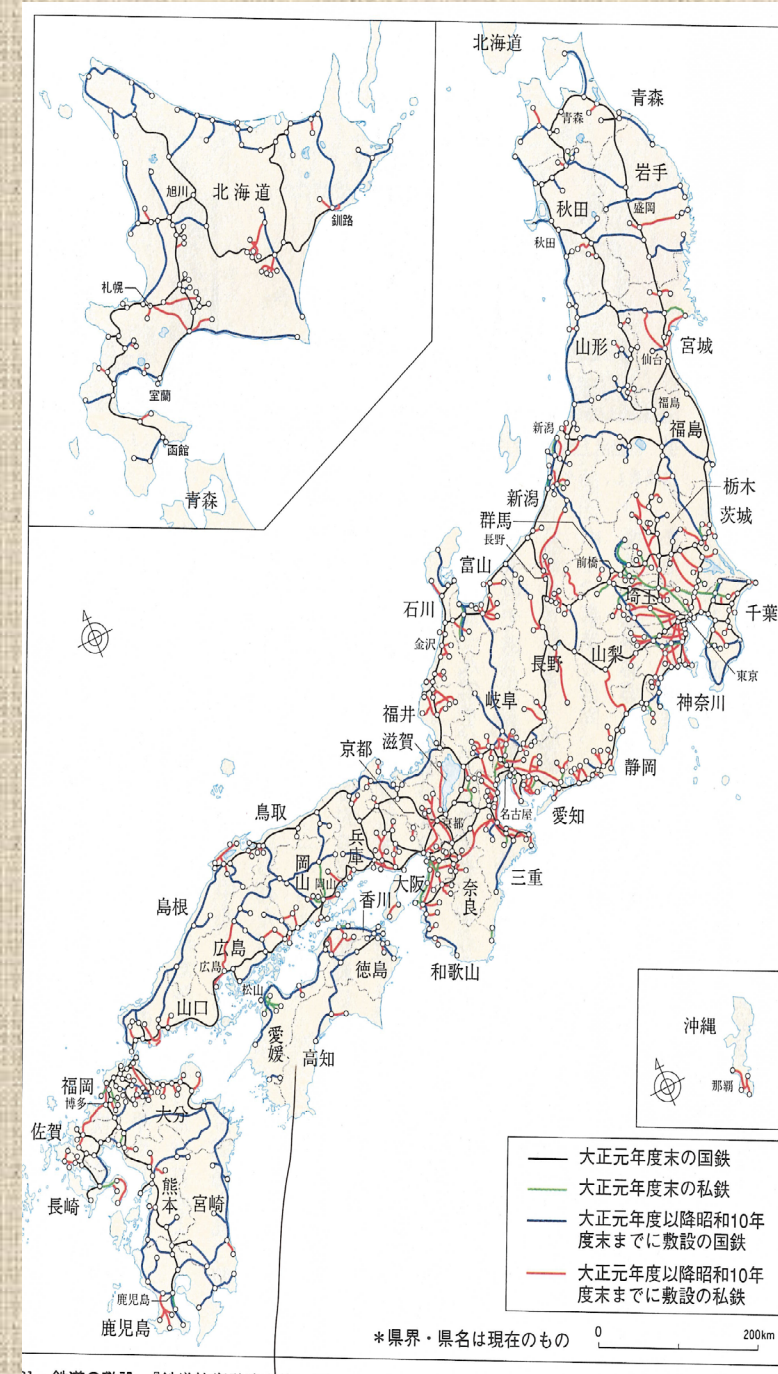
③都市の整備、高等教育の充実⇒**都市名望層にも支持拡大**

④**選挙法改正…小選挙区制、直接国税3円(自作農上層)以上**

⑤**財源⇒地租中心から消費税＋法人・個人の所得税へ移行**

⑥**義務教育における教育費充実は無視**

⑦**普通選挙は時期尚早の立場**



社会運動の本格化と原敬内閣

①大戦景気・米騒動をきっかけとした社会運動の活発化

②普選運動の広がり⇒衆院解散で対抗

③労働争議の活発化に対する弾圧と懐柔

1)川崎造船所…16000人参加、待遇改善を求める

⇒8時間労働承認（実際は10時間と残業代25%支払い）

2)官営八幡製鉄所…15000人参加⇒職工と、警官・憲兵が衝突

⇒厳しい弾圧224人解雇・組合を壊滅させる

⇒実働8時間三交代制の導入賃金7円(現：35000円)に

④思想弾圧＝思想善導？

1)白虹事件…筆禍を口実にメディア(大阪朝日新聞)を屈服させる

2)森戸事件…東京帝大森戸辰男教授の研究を起訴

3)大本教を不敬罪で弾圧

⑤大日本国粋会結成…床次内相が根回し、侠客らを組織

⇒労働組合や全国水平社の襲撃なども



川崎・神戸三菱造船所争議

社会政策の展開と社会の再統合

社会問題と社会運動…要求を受容しつつ、統治を再編

①内務省救護課⇒社会局に昇格(1920)

社会政策・協調政策の方向を打ち出す

②生活・健康対策

結核予防法・トラホーム予防法・健康保険法

借地法・借家法・職業紹介所法

大阪市（関一市長の主導）

公設市場・公設食堂、公益質屋・職業紹介所

「方面委員」（民生委員）制度…困窮者の調査・相談・保護

③労働組合法案や小作立法案制定を志向

⇒小作調整法・労働争議調整法制定

④刑事訴訟改正案…人権擁護と取り締まり強化

黙秘権、捜査機関の強制捜査・権限拡大

⑤民力涵養運動（内務省）・生活改善運動（文部省）

⑥国勢調査の開始

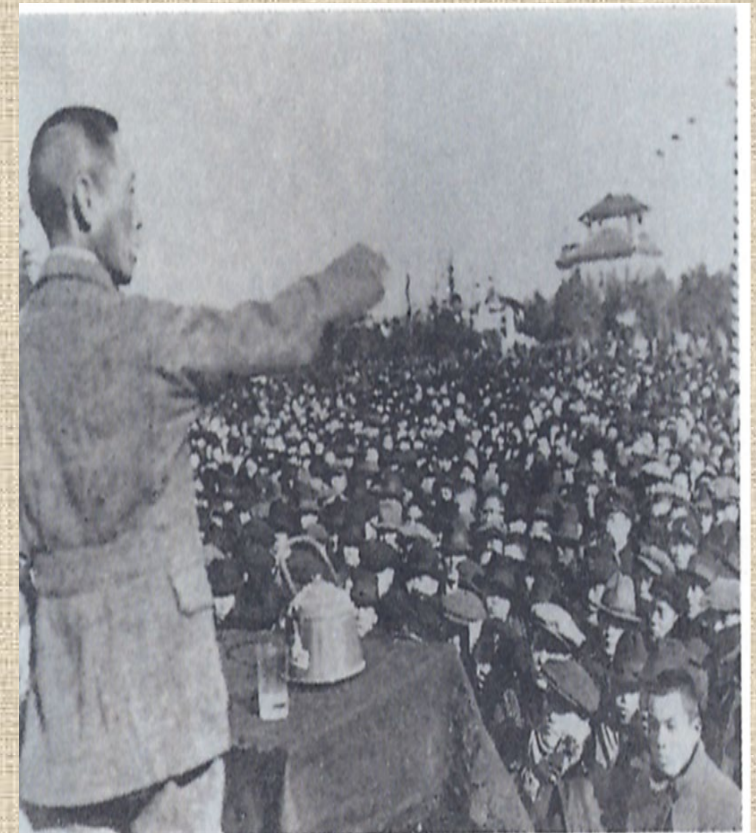
⇒私生活の領域を公共化し、主体性を通じて動員を図る



内務省社会局による「結核予防」の大判ポスター

普選運動の高まり

- ①シーメンス事件(1914)…世論と議会とのズレを認識
⇒いかに国民の意見を政治・議会に反映させるか。
⇒普通選挙への要求の高まり
- ②吉野作造…「普通選挙にもとづく議会で、多数派が責任内閣制を実現すれば、明治憲法下でも国民本位の政治が実現出来る」と主張
- ③1914雑誌『第三帝国』＝公然と普選論を提唱
⇒地方インテリ層・学生団体・労働運動(友愛会)などに
- ④第一次大戦の欧州…総力戦体制下、国民の支持を得るために普通選挙が一般化・女性参政権も実現に
- ⑤1919～普選運動の高まり
知識人・社会主義者・青年・学生・労働組合など広汎な層へ
第四二議会開催中…演説会・デモ行進・戸別訪問
連日1万人の大集会(東京)、34府県での開催
- ⑥憲政会・国民党、国会に普選法案を提出



普通選挙期成演説会で芝公園に集まった数万人の群衆の前で、熱弁をふるう尾崎行雄 1920年2月

原敬内閣と普選運動

- ① 1919~20 憲政会・国民党・普選法案を提出
憲政会…これ以上の思想の動揺を抑制するためのアメ
犬養毅(国民党)…既成政党に対抗するための青年の参加
- ② 国民の政治・文化意識の低さ・社会主義化など警戒
⇒ 山県らの危惧と一致＝内閣への協力を取り付ける
- ③ 原内閣…法案否決の代わりに衆議院を解散
⇒ 「普選実施を問う」選挙を実施⇒政友会の圧勝
＜圧勝の背景＞
 - ① 1919 選挙法改正 → 農村部につよい政友会に有利
1) 小選挙区制 2) 直接国税三円へ
⇒ 地方議会への普通選挙の導入は漸次すすめていく。
 - ② 政友会の積極財政＝地域利益を誘導
 - ③ イデオロギー選挙＝「普選脅威論」
⇒ 普選支持派は社会主義をめざすものと攻撃
「普選運送は、過激思想(社会主義)との深い関係があり、有産階級の政治を打破し無産階級の政治をめざす」
⇒ 急激な変化を望まない志向の有権者の支持



普選実現を求めるデモ行進

原内閣と「外交」

① **三一独立運動**(1919)への徹底的な弾圧

⇒ 斎藤実総督による文化政策の導入

憲兵統治から巡查統治、同化政策へ

② 間島出兵…1920、満州・間島省

朝鮮人が多数居住する地域において邦人が襲撃されたとして出兵

③ **シベリア出兵**…撤兵の方向を模索

⇒ 間島出兵・尼港事件などの事情と重なり、アメリカ撤兵後も戦闘を継続

⇒ 尼港事件(1920)…シベリアニコラエフスクにおいて、民間人を含む日本人がソ連側ゲリラに殺害された事件⇒北樺太占領

④ **パリ講和会議**…西園寺らを派遣。**山東省**の旧ドイツ利権の獲得を承認させる



1919年3月1日、ソウルで日本支配からの解放を望む朝鮮民族が起こした反日独立運動。独立宣言を発し、朝鮮独立万歳を叫ぶ示威運動は全国各地に波及したが、日本の軍・警察は武力でこれを鎮圧した

原敬による国民統合の強化…

① 1920年5月総選挙での政友会の圧勝＝内閣は信任されたのか…

464議席中、政友会278の絶対多数 憲政会110、国民党29（都市は野党が勝利したが）

⇒普選運動の沈静化＝普選派の分断成功

⇒重要なチャンスを失った？

② 議会の圧倒的多数＝強力な政治を可能に

⇒憲法体制の多元化の克服＝国家統合の方向？

1) 軍部に対する影響力の強化

シベリア撤兵を内閣が主導＝参謀本部の弱体化

2) 山県・山県派との関係の強化＝協力関係に

⇒旧来の体制への妥協でもある

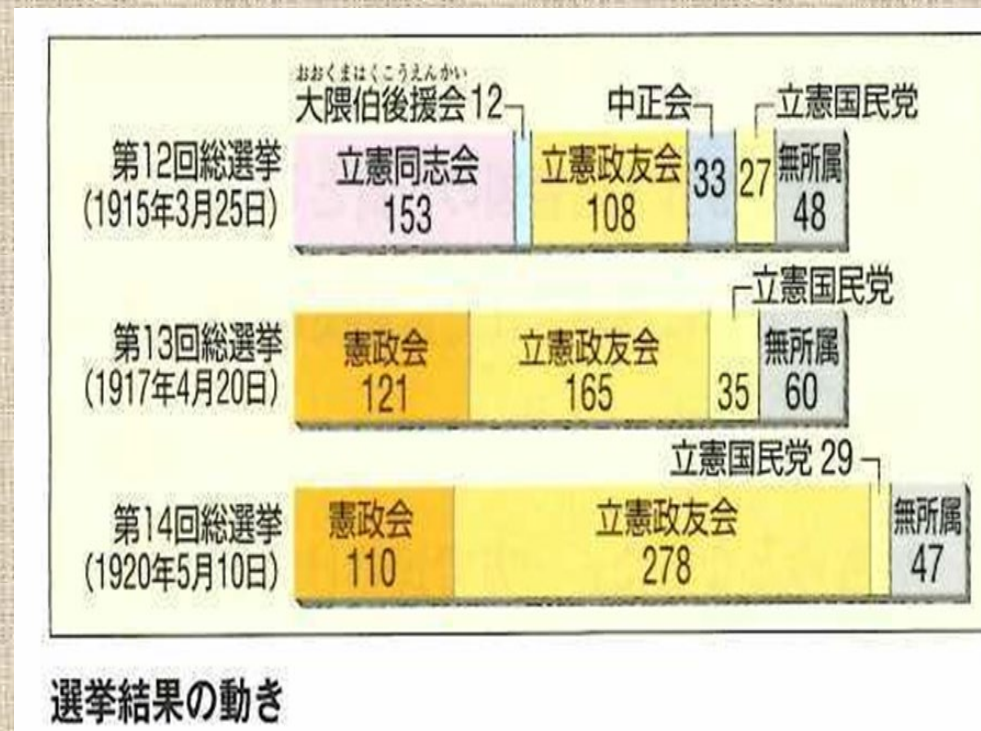
3) 貴族院の分断、勢力の浸透＝大臣受け入れ

4) 民衆の支持を背景に枢密院を弱体化

③ 組織よりも「原」という個人へ依存

⇒硬軟交えた巧みな党運営…資金と利権供与、清廉な生活態度

⇒「原」以後の政友会分裂（＝政友本党の分離）



原内閣の行き詰まり

①スペイン風邪の流行（1918～1919）

A型インフルエンザウイルス。1918年春に米国と欧州で感染が広がり、20年まで世界中で猛威を振るった。患者数は世界人口の25～30%ともされる。死者数は2千万～4千万人、5千万人との説もある。日本でも流行の波は3度起きた。当時の人口は約5700万人だったが、内務省統計によると患者数は約2380万人、死者は約38万8千人にのぼったとされる。後の研究では死者約48万人の推計もある。

（2020-04-24 朝日新聞 朝刊 特設C）

②1920/3 戦後恐慌の発生

⇒1920年代不況の開始、積極財政の実現困難に

③政友会党員の関係する汚職事件が表面化

…金権政治・党利党略への反発

1)満鉄疑獄事件 2)アヘン問題疑獄 3)東京市長疑獄

④宮中某重大事件…皇太子妃選定をめぐる事件

山県らの策動を支持⇒右翼・薩摩閥の反発

⑤皇太子、渡欧を推進



総選挙の場合に原は「一万円請求すれば一万五千元、二万円請求すれば三万円、いずれも請求額以上に援助した。党员のために利権を斡旋する劳もいとわなかった。（岡義武の著書より）

原敬暗殺

(1921大正11年11月4日)

1921/11 東京駅構内で原、刺殺される。

享年 66歳

犯人：中岡良一（転轍手、19歳青年）

動機：①尼港事件②青島返還問題③シベリア撤兵問題④ワシントン会議などの経過⑤満鉄疑獄事件⑥東京市疑獄事件⑦アヘン問題疑獄⇒原を殺せば名を挙げられると思った。
⇒右翼団体の関与が噂される

原内閣下の露骨を極めた党勢拡張、それに伴って生じたさまざまな政治的腐敗、しかもこれらに対して野党をはじめ広く世上に沸き立つ烈しい論難に直面しながらも絶対多数党の威を恃むごとく見える原の傍若無人、傲岸不遜の態度、原とその内閣とは、甚だしい不評・非難を世人の間に買うに至っていた。

（岡義武『近代日本の政治家』）



犯行現場の写真

暗殺三ヶ月前の雑誌のコラムより

野党政治家の中には大正初めの憲政擁護運動の再現を夢見ているものがある。…あの頃は国民は政党に大きな信頼を置いていたのであり、協力で横暴な官僚を倒して政党政治さえつくれば「国家の面目」は全く一新すると考え…信じていた。…

ところが今日では国民は政党に失望してしまっている。大隈・原の両内閣の施政、近頃の有様は、政党に対する国民の信頼を裏切るに充分であった。政党は「政権を私する為の朋党」であり「国利民福を念とする団結」でないことが、あまりに歴然とした。

国民の信望がこのようにすでに政党を去った今日、いかに好い題目を掲げても、国民の血を政党のために沸き立たせることは出来ない。(東洋経済新報のコラム・岡義武の引用による)



東京駅構内、
原の刺殺現場

「原敬の政治」とは何であったのか？

- ①旧勢力の統治から、議会中心・政党中心への国家統合をめざす
⇒元老・藩閥・軍閥政治から、地方も含めた国民統合へ「東北の復権」
- ②議会の多数＝「国民」代表の権威によって、旧勢力（元老・藩閥・官僚・軍部など）への優位な立場を獲得する。
- ③議会の多数確保と、それを背景とした権謀術数
選挙勝利＝有権者獲得を中心的課題に（汚職の温床）
旧勢力との妥協・癒着＝万年与党化を確保
- ④党内反対派に対する抑圧・独裁的手法
⇒党内外の多様な声を聞かない、聞こえない。
- ⑤民衆を利用する一方の、軽視あるいは恐怖。
- ⑥原が理解した「秩序」内での「改良」「改造」
⇒秩序を乱すと考える勢力には容赦ない抑圧・弾圧



原の墓。墓石には遺言によって名前のみを記す。原は「白河以北一山百文」との侮蔑のことばから、「一山」と号した。

おわりに～政党内閣の定着

①1921 高橋是清政友会内閣成立

⇒政友会の内部分裂で崩壊＝床次竹二郎ら政友本党を結成

②1922 加藤友三郎内閣成立＝中間内閣の時代

元老らの、高橋(政友会)・加藤高明(憲政会)への反発が背景

⇒山県有朋死亡、元老は西園寺中心に（松方は24年死亡）

③1923 関東大震災⇒第二次山本権兵衛内閣

④1924 虎ノ門事件⇒山本内閣総辞職に

⑤1925 清浦奎吾内閣成立＝貴族院中心の超然内閣

⇒第二次護憲運動＝護憲三派(憲政会・政友会・革新倶楽部)の結成

普通選挙実施をスローガンに選挙に臨み勝利

⇒加藤高明護憲三派内閣成立

⑥1925 普通選挙法・治安維持法制定

⇒護憲三派の分裂＝加藤憲政会内閣に

以後、元老・西園寺が議会第一党を首相に指名する慣例が定着

⇒政党内閣の「定着」（「憲政の常道」）（～1932）

1904～5 日露戦争
(桂園時代)

1912 大正時代に

1913 大正政変

1914 シーメンス事件
第一次大戦開戦

1918 シベリア出兵
米騒動発生
原内閣成立

1919 三一独立運動

1920 戦後恐慌

1921 原敬暗殺される
高橋内閣

1922 ワシントン会談
加藤(友)内閣

1923 第二次山本内閣
関東大震災

1924 清浦内閣
第一次加藤内閣

1925 普通選挙法
治安維持法

1926 大正天皇死亡・改元

参考文献

岡義武「近代日本の政治家」

伊藤之雄「原敬(下)」 「山県有朋」

坂野潤治「近代日本の出発」 「日本近代史」

武田晴人「帝国主義と民本主義」 「日本経済史」

松尾尊兌「大正デモクラシー」

成田龍一「大正デモクラシー」

鹿野政直「大正デモクラシー」

金原左門「昭和への胎動」

江口圭一「二つの大戦」

季武嘉也「原敬」 「大正社会と改造の潮流」

千葉功「桂太郎」

※高校日本史用図表（浜島書店・山川出版社・帝国書院）